

わが家の金銭教育

東京都・学習院女子中等科 2年 芳川 真穂

カードを入れてピッピッピ。いくつかの番号を入れるとお金が出てくる。この魔法の箱は何だろう。そう、ATMだ。お金はこのATMから好きなだけ出てくる……そう思っている小さな子も多いと本で読んだことがある。わが家では、父がファイナンシャルプランナーなので、子供の頃からお金について考えることは大切だと考えていて、いろいろなことを教えてくれる。将来、きちんとお金の管理ができるようにと今年の1月からおこづかい制度が始まった。最初にそれを聞いた時は、嫌^{いや}だなあと思った。決められた金額の中では自分の欲しい物が買えないかもしれないと思ったのだ。でも、おこづかい制がどんなふう役に立つのか、父に説明され、やってみることになった。

まず、父自身はおこづかい制ではなかったそうだ。でも、欲しい物がある度に両親にお金をもらうのではなく、父のお父さん、つまり私の祖父の経営していた会社の仕事を手伝った分のお金をもらっていたそうだ。また、父は、袋に入ったお給料を手渡されるのを毎月見て、祖父が働いたことでお金を稼ぎ、それを使って家族が生活するというのを実感として感じていた。今は、お給料が銀行に振り込まれることがほとんどで、子供達は働いたことでお金を得られるという実感がありません。しかも、キャッシュカードやスイカやおサイフケータイといったもので、買い物をしていたら、ますますお金の流れは見えにくくなっていく。だから、子供の頃にお金について教えてもらうことは大事だし、おこづかい制にして、いろいろな体験をすることは、さらに大事なのだと思う。

わが家のおこづかい制のルールは七つある。一つめは、「毎月1日に1か月分受けとる」ことだ。なぜなら、1週間ごとにもらって、すぐに使いきってしまった場合でも、少し待てばまたもらえるからいいやとなってしまうないように、1か月を通してお金を管理できる力を身につけられるように、ということだ。二つめは「おこづかいをもらったら必ず『ありがとうございます』と感謝の気持ちを伝え

る」ことだ。おこづかいは、親が一生懸命汗水流して働いて得た大切なお金から出ているので、必ず感謝の気持ちを伝えることが大切だ。三つめは「おこづかいの金額は1か月3,000円」だ。父がここ10年間の中学生のおこづかいの平均額を調べて、それを参考に決めてくれた。四つめは「おこづかいの使い道については信用する」というものだ。悪い物、例えば危険な物は買ってはいけないということ話をしてくれ、あとはあまりうるさく言わずに、私を信用してくれている。五つめは「自分でよく考えて買うこと。そして買った後、お金が少なくなることを嘆くのではなく、素敵なお品と出会えたことを喜ぼう」ということだ。何かを買う時には、欲しいと思ってすぐに買うのではなく、まずその物が「必要なもの」なのか「欲しいもの」なのかに分けて、よく考えてみる。また、「欲しいもの」はさらに「少し欲しいもの」と「本当に欲しいもの」の二つに分けてから、よく考えて買うことにしている。六つめは「お金が足りない時などは必ず相談する」ということだ。1か月のおこづかいの中で、きっちりと厳密にすることだけを目的にしているのではなく、経験を積むことや長く続けることを大切にしている。だから、お金が足りなくて困った時は相談するようにと言ってくれている。七つめは「おこづかい帳を必ずつける」ことだ。お金の使い道をしっかり考え、管理できるようになるためだ。一度、月の中旬ちゅうじゆんぐらいに父に、「おこづかい帳をつけてる？ 見せて」と言われた時、（見せたくないなあ）と思って、なかなか渡さなかった時があった。なぜなら、まだ月の終わりでもないのにおこづかいがほとんどなくなっていたからだ。しかし、何度か声をかけられ、そっとおこづかい帳を持って行った。すると父は、「なあんだ。なかなか見せてくれないから書いてないのかと思った。きちんとできているじゃない」と言った。だから私は、「早く使いすぎたから怒られるかと思った」と話すと、父は「今はそういう経験をすることも大事なんだよ。計画的に使った方がよかったかもしれないと考えたりするだろう？ そうやっているいろいろなことを感じるのが大切なんだよ」と言ってくれた。そうだ！ これは自分のためにやっているのだ。私が試行錯誤しこうさくごしながら自分のお金との付き合い方を学んでいるのだ。自分にとって何が必要で何が必要でないか見極める能力を身につけて、正しいお金の使い方ができるようになろう。お金に振り回されるのではなくお金を管理する能力を身につけよう。そして、大切なお金で買った大切なもの。ものを大切にする心をしっかりと育てていこうと思う。